

〔書評〕

## 霍士富著『九十年代以降の大江健三郎』

——民話の再生と再建のユートピア——

北野昭彦

本書には（九十年代以降の）大江文学を論じた最初の研究書としての意義があり、さらに興味深い見どころもある。

本書の研究対象は『M/Tと森のフシギの物語』（岩波書店、一九八六・一〇）から、『燃えあがる緑の木』三部作（『新潮』一九九三・九～一九九五・三）と、『宙返り』（講談社、一九九九・六）を経て、『取り替え子』（講談社、二〇〇〇・一二）、『憂い顔の童子』（講談社、二〇〇二・九）、『百年の子供』（中央公論社、二〇〇三・一二）などの近作にまでいたっている。これらの諸作を個々に論じた研究課題は、次のように、各章の章題によって示されている。

第一章 大江文学における「宇宙観」

——『M/Tと森のフシギの物語』をめぐって——

第二章 大江文学における宗教理念

——『燃えあがる緑の木』三部作を中心に——

第三章 「新しい人」に向けて

——『宙返り』を中心に——

第四章 多義的な救済物語

——『取り替え子』をめぐって——  
第五章 大江健三郎と魯迅

第六章 魂の鎮めを求めて——  
——『取り替え子』と『葉』をめぐって——

第七章 大江文学における時空間の表象  
——『百年の子供』を中心に——

終章 改造・再建のユートピア

これは近年の大江が世界に向かって開かれた姿勢で語っている大江文学の主題と方法を、一人の中国人研究者がどう捉え、追究したかを示すものである。その成果を三年間の留学中にまとめた本書は、（大江健三郎の世紀末から二十一世紀へ）というテーマに挑んだ最初の試論集として興味深く読める。

なお、第四章以下には、『取り替え子』以後の大江の近作・最新作が論じられている。これらは（二〇〇〇年代の）大江文学にたいして、二〇〇四年までの研究史をふまえながらオリジナルな

論を展開した最初の試論集として注目に値する。

\*

大江の新作をリアルタイムに論じて（九十年代以降の）大江文学研究に組みこみ、集成していく著者の仕事を意義あらしめていゝる所以は二つある。まず、大江はつねに時代と共にあり、異文化間の境界を越えて世界の読者に発信し、いつも先端を走ってきた作家だということである。また、大江文学の現在と時期区分の問題もある。森昭夫は「燃えあがる緑の木」から「宙返り」までを第三期とし、以後を第四期と見る（『新研究資料』現代日本文学第2巻「明治書院、二〇〇〇・一」）。が、私は柄谷行人の（『七年周期説』と、本書の問題設定との奇しき暗合に注目したい。

柄谷行人は笠井潔との対談（『國文學』一九九〇・七）で、「僕は、東洋でいう七年のサイクルで世の中は一変する」といふ説が大江自身に当てはまるんじゃないかと思う。（中略）一九五七年くらいに出てきた大江健三郎が六四年で次のステップに移ったということは、その説が典型的にあてはまるわけです。さらに七年後の七一年もそうだし、七九年が『同時代ゲーム』、『懐かしい年への手紙』が八七年というように、ほぼ七年ごとに転換している」といつている。これは一九九〇年三月時点の柄谷発言であるから、当時、「燃えあがる緑の木」も「宙返り」もまだ書かれていなかった。が、次の事実注目された。

大江はノーベル賞受賞後、「燃えあがる緑の木」を「最後の小説」とする小説断筆宣言をしたが、武満徹の死を契機に、小説家

復帰宣言をし、「宙返り」を発表した。これを柄谷の（『七年周期説』）で見ると、森昭夫説と違って、「燃えあがる緑の木」までが大江文学の六ラウンドで、「宙返り」発表の一九九九年から二〇〇五年までは七ラウンドになるはずである。

本書の著者もこれとほぼ同見解である。著者は柄谷説ではなく加賀乙彦の説を採っているが、「燃えあがる緑の木」をそれまでの「大江健三郎の文学的いなみの総決算」と見て時期区分するとともに、「宙返り」は「僕の新しい出発点」と見て時期区分するも重視し、「その『新しい出発点』とは何を意味しているのか」「『宙返り』から新しく出発した大江は、相次いで新しい作品を読者の前に示したが、それらは、現在に至ってどんな新たな境地を切り開いているのか」と問いかけている。

ところで、小説家復帰宣言をしたときの大江の抱負は、「これまでの小説とは異なり、三人称で複数の登場人物の内面を描く手法に挑みたい」というものだった。しかし、本書の著者が大江の新作から発見した「新しい出発点」「新たな境地」は、「複数の登場人物の内面を描く手法に挑む」という大江発言の範疇をはるかに越えたものである。著者はそのことを相次ぐ大江の新作から看破し、しかも、その「新しい出発点」「新たな境地」の発見とその論証を、第三章以下の中心課題としているのである。

\*

著者は、大江文学の「一方には暗黒の現代社会があつて、他方にはユートピアに近い理想世界が対置されている」ところにその

特徴を認め、そこに貫流する『救済』の理念」に焦点をあてて最新作までの「大江文学の全体像を読み解く」というとする。ただし、大江の近作・最新作を論じた先行論は、肯定論、否定論を問わず、まだ時評的、書評的なものが大方であるから、著者は先行論にたいする批判・補完の両様のスタンスで、現代文学理論を駆使し、哲学的考察も加えたオリジナリな論を展開している。

著者は唯一、八〇年代後半に書かれた『M・Tと森のフシギの物語』を本書で取りあげ、その理由を「これが大江文学の見取り図」になるからだという。これは明らかに「宙返り」が出現した時点での再評価である。すなわち、小説断筆宣言の時点での「最後の作品」であった『燃えあがる緑の木』も、小説家復帰の「新しい出発点」となった『宙返り』も、ともに「谷間の村」が舞台になっている。そこで「大江の『根拠地』——森の谷間の村における、神話と歴史の伝承をモチーフにした諸作の集大成」として、『M・Tと森のフシギの物語』の見直しが課題となる。それは「村——国家——宇宙」という反覇権主義・反天皇制の宇宙図の世界であり、「周縁」の「谷間の村」を「人間と自然とが共存する聖なる生命の源泉」とする世界であり、それを語る物語がカーニバル化され、劇化され、音楽も導入されて神話・物語・夢が統合された世界である。著者はこの「大江文学の到達点」を、以後の作品を論じるための「見取り図」として再認する。

次いで著者は、『燃えあがる緑の木』と『宙返り』を、「ともに人間存在の究極的関心である宗教信仰の課題を扱っている」作品

として取りあげ、『燃えあがる緑の木』までは主人公の死が自身の罪を無化するか、対立する集団を和解させるかの形で描かれていたが、『宙返り』は、主人公の死が「新しい人」を押し出し、『古い人』と「新しい人」が共に未来に向かって努力し、二十一世紀へ踏み出していく物語に発展していることを論証する。そして、これを大江文学の新たな境地と見るのである。

さらに著者は『取り替え子』が、故郷の民間伝承や神話を語ることで物語世界を作り上げた従来の作品とは異なり、『取り替え子』や『浦島太郎』という民話を導入する「新たな方法で、父親的なものと天皇制の問題や、未来社会における男性原理から女性原理への転回を暗示し、劇的な変調によつて全人類の未来を明るく展望している物語になっていることを論証して、ここに大江文学の新たな発展を見るのである。しかも著者は、大江における魯迅の影響を初めて問題にし、魯迅の『薬』との比較を通して、『取り替え子』の未来志向の鮮烈さを明示する。

著者はまた『憂い顔の童子』における国粹主義者の若者たちの潜在的「暴力」等を問題視し、ドン・キホーテの「冒険」をパロディー化した古義人の「冒険」を、『憂い顔』をしながら、『童子』の『夢の浮き橋』のごとく、日本の民主主義の夢を見続けていくのだ」と解して、こうした未来のビジョンのアイロニカルな描法に大江文学の「もう一つの新風」を見るのである。

大江は『二百年の子供』をファンタジー・ノベルと称しているが、本書の著者は、これが日本の民間伝承に潜んでいる「日本民

族の「心からねがう」こと——和解による平和をもたらす民族精神を現代に再現したものであり、また「未来は過去を媒介にして現在に到来する」という哲学に根ざした物語世界でもあることを論証し、ここに大江文学の新しい境地を認めるのである。

\*

こうして著者は、「大江文学は、日本近代の歴史と正面から向き合い、そこから人類全体の癒しと和解と「救済」を主題に据えることで一貫した世界を作り上げている」と結論し、「世界的な次元で高い意義を持つ」文学として評価するのである。

さて、日本の批評界には、構造主義やロシア・フォルマリズムに接近してからの大江にたいして、肯定、否定の両論がある中で、著者は外国人であるが、概して肯定的であり、反面、大江を否定的に見る論者には手厳しい。これは大江文学が異文化間の境界を越えて世界に訴える力を持っていることの証であるか。あるいは、求道的な作家である大江の文学と、真摯な一人の中国人研究者との、文化と言語の違いを超えた共感・共振によるのだろうか。ともあれ、著者に望まれる今後の課題をあげておこう。

まず、一口にユートピアといっても、特定の場所に外在するユートピア、個々人の中に内在するユートピア、既に存在しているユートピアを探索する物語、想像の中にあるユートピアを新たに建設する物語、等々がある。これらの要素が大江文学の主題にどのように絡み、また、初期作品から近作までに、どのような発展をしてきたのか。この点をもっと検証すべきであろう。

次に、大江文学のなかの「森」はますます純化され聖化される反面、「谷間の村」は森から切り離され、「美しい村」から「毒の力こそが恢復」する村に変わっていた。では、大江の近作では、谷間の村が再び「美しい村」に回復する方向にあるのか、それとも創造的破壊による終末へ向かっているのだろうか。

また、「同時代ゲーム」の後、家庭、癒しなどの主題が大江文学のなかに現れてきたのは、読者層の変化、新しい読者層・女性の読者層の開拓などが関わっているのではないか。

さらに、著者は「宙返り」の育雄が宮澤賢治の描くグスコードリを人生目標にしていたことを重視している。が、「革命女性」にも賢治の「農民芸術概論綱要」の引用がある。また、私見によれば、「火山」にも「グスコードリの伝記」が変容され、「懐かしい年への手紙」には賢治の「ポラーノの広場」の構想の取り込みが隠されていると思われる。こうした賢治テクストの（引用）や（引用符のない引用）の問題は、現在の研究段階ではまだ重視されていないが、今後の大江研究の課題の一つになろう。

最後に、「取り替え子」と魯迅の「菓」との比較文学研究に見事な手際を示した著者に、同じ方法で「憂い顔の童子」と「ドン・キホーテ」との比較文学研究に着手することを勧めたい。

（著柿堂、二〇〇五年三月二十四日、二六五頁）

本体価格二〇〇円

（きたの・あきひこ 西安交通大学客員教授）